

# 資料涉獵余話

その82

昨夏、天龍峽をど  
りを見物に帰郷した  
昭和6年生まれの内  
雪彦さんに同道願っ  
て、稲垣陶石の、昭和  
12年生まれの長女を割  
烹いまだに訪ねた。そ  
の息子さんのつくる料  
理に舌鼓を打ちなが  
ら、おいしいお酒をい  
ただき、陶石の長女か  
ら陶石の思い出話を聞  
かせていただいた。

陶石は、小学生の時  
から俳句をつくりはじ  
め、戦中家業の天竜峽  
焼きの陶工を継ぎなが  
らも俳句一筋。晩年は  
長野県俳人協会の会長  
も務めた陶石について  
はまたいすれ書く機会  
もあろうかと思うが、  
その折、雪彦さんが、  
稲垣陶石が郷土史家で

あつた雪彦さんの父・  
牧内武司の晩年のこと  
を書いた「幻の竜」と  
題された新聞コラムを  
持参し、見せてくれ  
た。文面は以下のよう  
である。

## 龍の昇天

嶋 不 濁

※ ※ ※  
節分過ぎの十日朝、  
天竜峽の姑射橋を渡っ  
てゆくと向うから牧内  
さんがにこにこ笑いな  
がらこちらへやってくる。  
「陶石くん、実はな  
辰年の新春第一の辰の  
日それも辰の刻に天竜  
川から竜が昇天するの  
で見にゆくとこな、行  
って見んかな」大真面  
目である。「ぼつぼつ辰  
の刻になるでなむ」橋  
の上から下流の竜角峰  
の方をじっと見つめて  
いる。牧内さんが常々

すこし変っていること  
は承知していたし、竜  
が昇天すると信じてい  
るとしても如何にも夢  
があつてよいではない  
か、私も熱心な牧内さ  
んの話につりこまれて  
じっと下流を見ていた  
が、どうも竜らしい  
ものは見えない。  
「お前さんには見え  
んかも知れんに」どう  
も凡人の眼には見えぬ  
らしい。「牧内さんには  
見えたかな」私の反問  
に見えたと見えぬと  
も返事がない。それで  
も牧内さんには見えた  
のかも知れない、けろ  
りとした顔で「ほいこ  
の頃昔の囲炉裏を復活  
して桑畑を焚いてあ  
ろいろ言ってくれた  
な、身体中あつたまっ  
おいたとのこと、成る

ていいに」私はこの一  
言にすっかり囲炉裏へ  
の郷愁にとりつかれ、  
牧内さんに従つてゆ  
く。  
牧内さんは又話好き  
で次々言葉がとんで出  
る。「陶石くん、駅に飾  
つてあるあの色紙を呉  
れんかな、あの句は私  
の家を見て作ったよう  
な作だなむ」。その色紙  
は、  
峡小春蜂の巣がらを  
軒に吊り  
である。何でも牧内  
さんの話では昨年の  
秋、大きな「あかぼ  
ち」が軒に巣をかけて  
見る人が取るときには  
手伝つてやるとか、い  
ろいろ言ってくれた  
が、全然手を付けずに  
おいたとのこと、成る

程庭に立つて見上げる  
と見事なものである。  
「もう二匹も蜂は残  
つておらんかも知れん  
に、こんなものを取っ  
て喰べてみたところで  
仕様がなしいし、こうし  
ておいたのも私の慈悲  
な」牧内さんは慈悲と  
いう語に力をこめてみ  
ずからもその語のよう  
しさに酔っているよう  
である。  
どざりと桑畑を抱  
えてきて、囲炉裏を焚  
きつけた。煤けた自在  
鉤にはまっ黒になった  
大鉄瓶が掛っている。  
すぐ手の届くところに  
糸車や燈明台の如何に  
も古風なのが置かれ、  
万点の風情で、客を招  
ける主人のこまやかな  
心遣いがわかる。  
「陶石くんにはお茶  
よりこの方がいいか  
ある。こんな純朴なお  
婆さんがいまときある  
だろつか、竜の見えな  
いことは承知してい



稲垣陶石  
（『瀨音』昭和62年）より



牧内武司  
（牧内雪彦蔵）

「お前さんの好きな  
いい着があるもの」煮  
干の袋をそのまま差し  
出される。お猪口じゃ  
小さいと会津八一書の  
歌入りの大きな湯呑に  
なみなみと注いでくれ  
る。  
ほた火に火照つた五  
臓へ銘酒の冷たいのが  
沁み徹る。すっかり馳  
走になって牧内さんの  
話術のとりこになって  
いると、がらがらと表  
の戸が開いた。一人の  
老婆である。  
「おいさん竜の見え  
るのは今朝だかな、わ  
しゃ竜を見せてもらわ  
つと思つて出掛けて来  
たんな」  
至極まじめである。  
聞いていた私は呆気に  
とられた。これはすっ  
かり牧内さんの話を信  
用してやってきたので  
ある。こんな純朴なお  
婆さんがいまときある  
だろつか、竜の見えな  
いことは承知してい  
るのかも知  
れない。  
私は一世  
紀も二世紀  
も昔へ引き  
戻されてゆ  
くような錯  
覚にとらわれた。  
快よく酔の廻つた私  
の眼にすっかり春と思  
われる日が天窓から射  
し込んできた。  
斯ういう人が一人や  
も、いかにも牧内武  
司、いかにも稲垣陶石  
らしくて、久しぶりで  
楽しい文章を読んだの  
で紹介する次第。